

第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号9番 札幌北斗高等学校（石狩支部）

「猫を猫と呼ぶ」 作：須知英生（顧問創作）

言葉では言い表せない物寂しさ。そんな表現が似合う物語であつたと感じられる。

緞帳が上がるとそこには広々とした公園が広がっていた。公園のベンチには通話越しに誰かに謝罪するOLと、彼女を慰めるように野良猫が1匹。そして、ホリーがOLに話しかけることで物語が展開されていく。登場人物全員が名前ではなく、あだ名で呼びあっていたからこそ親しみを持つことができ、愛着が湧いていった。

物語の軸となる5人全員が、人には言えない様々な悩みを抱えており、それを猫に打ち明けることでそれぞれの物語が浮かび上がってくる。講評委員の中でも、焦点を当てている人物が異なっており、色々な視点でこの物語を楽しむことができる。

物語の主軸となるホリーとOL。この2人は仕事等も含め、対比が感じられた。ホリーのみ過去が明かされ、共感できる部分が多かった印象だ。また、ホリーは公園に来る色々な人と関わっており、“猫の代弁者”や“人間版の猫”なのではという意見も上がった。

OLはホリーと比べて成長途中であり、他の人物と比べてもOLは弱いところが見えやすい印象であった。それぞれ猫に違う名前を付けていたのに対し、OLは「猫ちゃん」呼びで信念を貫き通し、気弱な一面がありながらもしっかり「自分」を持っている、そして“成長”という言葉が似合う人物であった。ほかにも、ママは一人だけ大人びていて、みんなを見守り、支えている存在のように感じられた……引っ越す際に「猫を連れて行ったらダメかな？」と望むリストラにいちばん人間味を感じた……先生の「なりたい自分を演じろ」というセリフが印象に残った……など様々な意見が共有され、それぞれの人物に焦点が当たっていたのだと考えられる。



演出面では暗転が無く、舞台装置が変わっていないのにも関わらず、場所が明確であり分かりやすかった。また、猫の声にも肯定や否定など様々なレパトリーがあり、感情がしっかり伝わってきた。演技面でも、雨が降っている時の傘の扱い方や、ギターを本当に弾いているように見えるなど、細かい所作が丁寧であった。

劇全体を通して、どこか悲しい・物寂しい中でも5人それぞれが希望を持ち、一歩前に進むことが出来たという印象を受けた。一本の洋画を見ているような、とても充実感のある作品だった。